

佛教大学 文学部論集 第97号 (2013年3月)

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

——さばにを中心に——

黄 當 時

〔抄 録〕

沖縄に、「さばに」という名の船があり、『日本国語大辞典』は、名称の由来を説明しないが、「さばに」は、「舟/船+α」の構造と意味をもつ名称のように思われる。

豊玉姫の説話の中に、屋根をまだ葺き終えないうちに産気付いた姫が産屋に入り出産する場面があるが、『記』『紀』は、火遠理命が姫の頼みに背いてその様子を覗いたところ姫は「和邇」や「龍」の姿に変わっていた、と記述している。

「和邇」と「龍」は、いずれも同じ情報を伝えているが、適切な海の民の視点を欠いたままでは、正確に理解できない。言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解くべきである。

「和邇」と「龍」は、「大型のカヌー」である。「wa'a-nui (和邇)」は、ワアヌイもしくはヴァヌイに発音されるが、Hawai'iがハワイではなくハヴァイに発音されるように、沙+wa'a-nuiは、サヴァヌイのように発音され、やがてサバヌイ、サバニとなったのではないか。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、ポリネシア語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード さばに、八尋、和邇、龍、Hawai'i

1. はじめに

沖縄に、「さばに」という名の船がある。『日本国語大辞典』（第二版第六巻）は、次のように説明する（p.150）。

さばに〔名〕沖縄地方で使われる民俗的な小船。本来丸木船であったが、近年は材料的な制約からはぎ合わせ船となる。幅の狭い細長い船型を特徴とし、櫂、または小さい帆をあげて航海する。〔方言〕丸木船。刳舟（くりぶね）。沖縄県首里993 石垣島・波照間島996

名称の由来については、説明がないが、説明が可能かどうかはさておき、「さばに」は、舟/船という意味しかない最小単位の単語ではなく、「舟/船+α」の意味構造をもつ名称のように思われるが、いかがであろうか。

国内研修で半年滞在した彼の地で、沖縄方言を解する方々に「さばに」の意味構造や名称の由来を尋ねたものの、予想通りではあったが、何ら答えを得ることはできなかった¹⁰¹⁾。

この単語ができた頃の人々には理解が難しい言葉ではなかったはずなのに、後世の人々には何故説明できなくなったのであろうか。後世の人々は、言語の面で、その頃の人々と同程度の知識がないために正確に理解できない、という可能性があるが、いかがであろうか。「さばに」は、その一部、或いは全部がいわゆる海の民の言語であり、私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語についての知識がないために、その意味が正確に理解できない、という可能性があるが、いかがであろうか。私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性があるが、いかがであろうか。

陸の民の私たちには、いわゆる海の民のことについて判断する能力や知識が欠けているかもしれないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができれば、「さばに」の説明に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。

言葉は、文化である。異文化の言葉は、異文化の知識で解くべきである。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の海の民の言語や文化に関する知識を入手しつつ、言語学的視点から、「さばに」の読みと意味を探ってみたい。

2. 有用な知見

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、僅かに二人の研究者が「枯野」船解明の過程で示した知見が有用と思われる。

まず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の実住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の例を紹介しつつ基本的で重要な事柄を次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破

口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

3. 『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので³⁰¹⁾、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫櫛（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫櫛（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫櫛」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、（四三三六）の「伊豆手夫櫛」³⁰²⁾と（四四六〇）の「伊豆手乃舟」³⁰³⁾である。

異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくい、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「卡」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール；信用卡、クレジットカード）。ところが、「啤」や「卡」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「異文化の語彙（外来語）＋類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語にも見られる。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫櫛」や「舟」という類名を加えて、「手夫櫛」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、（四四六〇）では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、（四三三六）では、

音節数の制約により一音節少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、(四三三六)で略称の「手」で詠まれた船は(四四六〇)では音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、全称の「手乃」は二音節であり、一音節少ない略称にするには、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残すか、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残すか、の二つの選択肢しかない。実際には、後置要素「乃」は略せても（前置要素「手」が略称として残る）、前置要素「手」は略せない（後置要素「乃」が略称として残ることはない）。全称の「手乃」と略称の「手」は、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造の存在を示している。

ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。

例えば、女性の名前に、菊乃(野)、雪乃(野)、幸乃(野)、綾乃(野)、等がある。名付け親は、女の子に付けるのにふさわしい名前、というくらいの意識や知識しかなく、乃(野)を付さない、菊、雪、幸、綾、などとの違いは、わかっていないであろう。このことは、学者、研究者でも同じで、乃(野)の有無に意味の違いがあることは認識していないし、また認識できず、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、というくらいのことしか説明できないのではないだろうか³⁰⁴⁾。

人名の乃(野)は、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡であるが、今日まで受け継がれており、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手^て」としているが、「手^て」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り敢えず一つ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「手^た」と詠んでいた可能性を排除することができない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。このケースでは、歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか³⁰⁵⁾。

次は、(三一七二)の「熊野舟」³⁰⁶⁾、(〇九四四)の「真熊野之船」³⁰⁷⁾、(一〇三三)の「真熊野之小船」³⁰⁸⁾である。

(一〇三三)の「真熊野之小船」は、(三一七二)の「熊野舟」や(〇九四四)の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプのものを指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、(三三六七)の「安之我良乎夫祢」³⁰⁹⁾である。

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙（外来語）＋類名」という表記法で書き記

されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫舩」という類名を加えて、「小船」や「乎夫舩」としたのである。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995aでは、「真熊野之小船」の「小」に「を」のルビを振って「を小」とし、同1995bでは、「安之我良乎夫舩」の「乎」に「を」のルビを振って「を乎」としているが、「を乎」は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「を小船」や「を乎夫舩」の正確な意味がわからず³¹⁰、取り敢えず接頭語か形容詞と見なして「を」の訓みをつつ当てただけ、という可能性はないのだろうか。慎重な解析では、歌人が「を乎」と詠んでいて可能性を排除することができない。「を乎」には、「を」と「こ」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「を」を書き記すのに用いられたり「こ」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。熊野の「を小船」と足柄の「を乎夫舩」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎」と書き記した、と考えるだけでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、や、おみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあるのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」もしくは「こ」を書き記した（「を」もしくは「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「を乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語における船舶名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。学者であれ研究者であれ、古代日本語の中に「こぶね」（或いは「こ」）と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

このケースでは、歌人は、「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表意に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫舩」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小船」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまったのも無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したもの（書き記したもの）ということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」

を、そして、「小/乎」は、「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃、tau-nui」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように (p.142)、(四三三六)の「手、tau」は(四四六〇)の「手乃、tau-nui」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手、tau」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎、kau」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手、tau」が使われ、熊野や足柄では「小/乎、kau」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手、tau」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎、kau」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、後置修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野:kau-nui、狩野³¹¹;tau-nui、手乃³¹²) と、後置修飾語の「nui、野/乃」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手; kau、小/乎) があったことがわかる。

4. 無目籠

海幸彦・山幸彦の説話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。この船には、幾つかの名称があるが、『日本書紀』(神代下、第十段、正文)は、無目籠^{まなしのかたま}⁴⁰¹⁾、と表記し、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、密に編んだ隙間のない籠^{かご}⁴⁰²⁾、と訳している。

籠^{かご}は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。大事な任務を持って遠くへ出かける時にわざわざ造って乗るようなものではない。

茂在氏は、次のように述べる⁴⁰³⁾。

……無目堅間小舟……は御存知であろう。……在来は目つぶしをした籠の舟と訳しているこの船。無目は水密なと訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといたら、「カタマ小舟」と訳するのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。……もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏が、「籠^{かたま}」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功

績は極めて大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗物としては不適當である。『記』『紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目が無い」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、単に龍とすることがある⁴⁰⁴⁾。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の装飾が施され、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい⁴⁰⁵⁾。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられているが、このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章を一つ見ておきたい⁴⁰⁶⁾。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言ひ、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭とすることがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。これが、「無目籠」が船眼の装飾がない船であることを教えてくれている。『記』『紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目籠」と呼ぶ人々がいたのではないか。少なくとも、その頃の日本人がそのような言葉や文化が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目籠」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目籠」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目籠）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』には、さらに、竹を取って大目籠を作った⁴⁰⁷⁾、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を同時に伝えられる好個の文字と考えられたのではないか。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で⁴⁰⁸⁾、ある文化圏では無目籠とも呼ばれ、船材に竹を用いている船」である。

「無目籠」が示す全体像には圧倒される。この一語には、タミル語圏の文化と中国江南の文化が織り込まれている。古代の日本人が途方もなく広い地域の人々と交流があったことには、

改めて驚かざるをえない。

5. 八尋和邇

豊玉姫の説話の中に、屋根をまだ葺き終えないうちに産気付いた姫が産屋に入り出産する場面があり、『記』『紀』は、火遠理命が姫の頼みに背いてその様子を覗いたところ姫は「和邇」の姿に変わっていた、と記述している⁵⁰¹⁾。

この「和邇」は、表記に幾つかのバリエーションがある。

『古事記』（上巻）は、「八尋和邇」と表記し、山口佳紀、神野志隆光1997は、八尋という言葉に、“「八」は実数でなく、大きいことの形容”と頭注を付し、「大きなわに」と訳している⁵⁰²⁾。

『日本書紀』では、「八尋大熊鰐⁵⁰³⁾」（神代下、第十段、一書第一）、「八尋大鰐⁵⁰³⁾」（神代下、第十段、一書第三）と表記されている。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、八尋大熊鰐という言葉に、“「尋」は両手を広げた長さ。「八尋」で長い意。→130⁵⁰⁴⁾注八。「大」は美称、「熊」は勇猛の意の美称。ただし、東アジアにおいて「熊」を水神とする観念があったとする説もある。「鰐」はサメ。→注十二”と頭注を付し、訳は原文の表記を採用し「八尋大熊鰐」としている⁵⁰⁴⁾。また、八尋大鰐には頭注を付さず、訳は原文の表記を採用し「八尋大鰐」としている⁵⁰⁵⁾。

小論では、便宜上、この三者（八尋和邇、八尋大熊鰐、八尋大鰐）を「八尋和邇」の一語に括って考察を進めたい。

ところで、火遠理命が豊玉姫の産屋で見たこの生物（無生物の可能性も排除できない。日本に爬虫類のワニは生息しないので、この言葉は、爬虫類のワニ以外の何かをさしていた可能性が高い）には、「八尋和邇」という名称の他に、「竜」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）という名称もある⁵⁰⁶⁾。

「八尋和邇」と「竜」⁵⁰⁷⁾の間には、何ら関連がないように見えるが、同じできごとの報告である以上、両者は同じものを指しているはずである。つまり、用いられた単語に違いはあるものの、伝達しようとする情報には違いがないはずである。『日本書紀』（神代下、第十段、正文）に登場する「竜」は、『古事記』（上巻）や『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）、（一書第三）に登場する「八尋和邇」と同じ生物（無生物の可能性も排除できない）と見てよい。

『日本書紀』（神代下、第十段、正文）が提供する、「竜」は「八尋和邇」に同じ、という情報は、極めて重要である⁵⁰⁸⁾。竜という情報が一つ増えるだけで、和邇という情報だけでは和邇を正確に理解・解析できない解析担当者にとっては、竜という情報の解析を通じて、和邇を正確に理解・解析できる可能性が出てくるからである。もちろん、和邇という情報だけで和邇を正確に理解・解析できる解析担当者にとっては、竜という情報が自己の結論の補強材料となることは、言を俟たない。

龍は、通常、想像上の動物を意味するが、火遠理命は、豊玉姫の産屋で想像上の「龍」を幻視したわけではなかろう。和邇と龍の二つの名称は、ある生物（無生物の可能性も排除できない）が古代の日本では時代差や地域差あるいは個人差により「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりしていたことを教えてくれている。火遠理命が目にした、「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりしていた生物（無生物の可能性も排除できない）は、一体どのような生物（無生物の可能性も排除できない）なのであろうか。

誰しも、「和邇」や「龍」が何であるのかが正確にわかりさえすれば解明の扉を開けられる、という見当はつく。同じ生物（無生物の可能性も排除できない）が「和邇」と呼ばれたり「龍」と呼ばれたりしていたことをどう理解すべきかについて、合理的な解説や説明が全くなされていないが、それは、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏には、手の出しようがないからではないのだろうか。海の経験の乏しい私たちに、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識などが不足してはいないのだろうか。

『古事記』は、火遠理命は産屋を覗いた後驚いてすぐさま逃走した、と記述しているが、事実ではない可能性が極めて高い。『古事記』の記述が事実とすると、どうしても矛盾が生じてしまうからである。冷静な裁判官が矛盾する証言を採用しないように、私たちも、矛盾があるのかないのか、具体的には、どこまでが事実でどこからが事実でないかを冷静に見極めねばならない。矛盾を孕む記述を鵜呑みにしたままでは、解析結果の信頼度は、当然ながら、鵜呑みの程度に応じて低くなる。

『古事記』では、八尋和邇を見た人物と逃走した人物があたかも同一人物であるかのように記されているが、八尋和邇を見た人物と逃走した人物は同一人物ではないだろう、と考えてよいものと思われる。そもそも、逃走した人物などいなかった可能性も否定できないのではないか。

解析担当者にとって、火遠理命が和邇の大きさを八尋（ $1.8\text{m} \times 8 = 14.4\text{m}$ ）と観察し報告していることは、極めて重要な意味を持っている。

ここで見落としてはならないことは、和邇と呼ばれる生物（無生物の可能性も排除できない）の大きさが、例えば、七尋や九尋ではなく八尋であることを報告するには、報告者（火遠理命）は実際にその大きさを測定し、七尋や九尋ではなく八尋であることを確認しなければならない、ということである⁵⁰⁹⁾。

形状の観察はもちろんのこと、大きさについても正確な数値を入手しそれを報告できる者が「即見驚畏而」することはあり得ない。言い換えれば、火遠理命は、和邇の大きさを測り八尋という数値を入手したが、決して、驚いて逃げてはいないのである。

火遠理命が驚いて逃げたという記述は、決して、火遠理命の見せた反応や行動ではなく、どうやら、『古事記』の編纂者が語部(集団)の伝承に自己の創作を書き加えたものであるらしいことが推認できる。『日本書紀』の記述内容と対比すればよくわかるが、『古事記』の当該箇所

の記述は、海の民の言語や文化を理解しない何者かの手によって加筆されたようである。加筆は、和邇（や龍）の意味が理解できなくなった後になされたものであろう⁵¹⁰。

ここには見落としてはならないことがもう一つある。それは、火遠理命はなぜ逃げ出さなかったのか、ということである。言い換えれば、火遠理命は、和邇と呼ばれる生物（無生物の可能性も排除できない）が自分に危害を加える恐れがないことを認識していたのではないか、ということである。

さて、日本には、いわゆる爬虫類の鰐は、大小にかかわらず、生息していないので、この「和邇」は、「八尋」（14.4メートル）という大きさから見ても、いわゆる爬虫類の鰐ではないらしい、と考えてよさそうである⁵¹¹。恐らく、「ワニ」という音声、あるいは、「ワニ」に似た音声で呼ばれた何らかの生物（無生物の可能性も排除できない）だったのだろう、と考えてよいであろう。さらには、八尋（14.4メートル）という大きさから見て、生物であることは、検討の対象から外しても差し支えはなさそうである。そうすると、「八尋和邇」は、何らかの無生物ということになるが、このような無生物に身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることは、極めて難しい。この無生物の大きさ（長さ）が八尋（14.4メートル）であることを考えると、発泡スチロールのような極めて軽量の材料で作られた物でない限り、ほぼ不可能である。その上、『記』『紀』の記述の通りであれば、この産屋には、この八尋（14.4メートル）の無生物が前後左右に動ける空間があったことになるが、実際には、そうではなかったのではないか。

『記』『紀』は、産屋の大きさに言及しないが、大西一彦氏は「鵜羽神社の縁起と浦生の語源」の中で、高松市史を引用して、「社伝には上古豊玉姫命がこの地に八尋の産殿（ウブヤ）を造られそこでウガヤフキアエズノミコトをお生みになった。それからここを八尋島とよぶようになり、のち八尋島が八島となり、更に屋島になったと伝えている」と述べている⁵¹²。

急ごしらえの産屋にしては、八尋の大きさ（長さ）はかなり立派であるが、この物語の内容からすれば、この程度の大きさは必要であろう。鵜羽神社の社伝は、この物語の中に八尋和邇が登場するために、単純にサイズを合わせた記述をしているだけの可能性もあろうが、社伝が提供する情報は、私たちの解析に重要な役割を果たし得るものと見てよかろう。以下、産屋の大きさ（長さ）は八尋であった、としておく（幅は未詳）。

火遠理命は、豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる無生物の側で陣痛に苦しむ姿を見たのではないか。火遠理命は、そのことを報告し、所属の語部(集団)は、当該報告を伝承するよう指示されたのであろう。語部(集団)は、特殊な能力やノウハウを持つ人々であり、伝承は、極めて高い精度でなされた。しかし、人間が膨大な音声情報を100%伝承し続けることは、所詮、無理であり、99%の伝承を時折でも繰り返す内に、情報が徐々に劣化したことは、後世の解析担当者には残念であるが、自然なことであった。伝承は、やがて、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる生物になってうごめく姿を見た、と劣化したのであろう。そして、八尋和邇(と呼ばれる無生物)

は決して危険ではなかったのにもかかわらず、『古事記』は、火遠理命は見ただけで逃げ出した、としてしまったのではないか。

虚偽は、事実ではない。虚偽は、発覚するしないにかかわらず、事実ではない内容を含むが、ここでは、八尋という情報を入手した冷静さと、見たとたんに逃げ出した動転振りとを同時に記述することで馬脚を現してしまっている。

6. 和邇と龍

日本には、いわゆる爬虫類の鰐は、大小にかかわらず、生息していないので、「八尋和邇」は、その大きさから見ても、いわゆる爬虫類の鰐ではなさそうだ、恐らく、「ワニ」という音声で呼ばれた何らかの無生物だろう、という見当はついていた。

さらに、この無生物には、「八尋和邇」という名称の他に、「龍」という名称もあることで、船舶についてある程度の知識があれば、答はほとんど自明のようなものであった。

龍は、通常、想像上の動物を意味するが、火遠理命は、豊玉姫の産屋で想像上の「龍」を幻視したわけではない。火遠理命が目にした龍が龍舟/龍船の龍であることは、言を俟たない。

先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「和邇」は「wa'a-nui」を書き記したものであろう。「和邇」は、「大型のカヌー」を意味するポリネシア語「wa'a-nui」を、漢字が持つ表意機能と表音機能のうち、後者を利用して書き記したものであり、漢字が持つ意味は考慮する必要がない、と考えてよいであろう。

辞書の説明も挙げておきたい。

wa'a. n. 1. Canoe, rough-hewn canoe, canoemen, paddlers; a chant in praise of a chief's canoe.

nui. nvs. Big, large, great, greatest, grand, important, principal, prime, many, much, often, abundant, bulky;⁶⁰¹⁾

火遠理命が豊玉姫の産屋で見た無生物は、ポリネシア語に由来する表現で言えば、和邇 (wa'a-nui)、中国語に由来する表現で言えば、龍、という大型のカヌーであることがわかった。古代の日本では時代差や地域差さらには個人差により、ある種の船をポリネシア語に由来する「和邇 (wa'a-nui)」で呼んだり中国語に由来する「龍」で呼んだりしていたのである。

火遠理命が和邇の大きさを八尋と観察し報告していることは、極めて重要な意味を持っている。八尋という数値は、豊玉姫の産屋に置かれた和邇 (wa'a-nui) が主観的に大きいとか小さいとかではなく客観的に14.4m (1.8m×8) の大きさ (長さ) であったことを伝える極めて重要な情報である。

先に、逃走した人物などいなかった可能性も否定できない、と述べたが、実際、そのような者はいなかったであろう。『記』『紀』には記載がないが、実際には、産婆が立ち会っていたであろう。産婆は、豊玉姫が連れて来た可能性もあり、火遠理命が現地で手配した可能性もある。いずれにせよ、臍の緒を切り、子を取り上げた者が立ち会っていた、と考えてよからう⁶⁰²。

海の民が大型船を使用する場合でも、外洋航海には常に危険が伴い、不要不急の物品を積載することはないが、豊玉姫は、その身分の高さを考えると、ある程度、出産用品や嬰兒用品・育児用の食品を持参したと考えてよいのではないか。

先に、形状はもちろんのこと、大きさについても正確な数値を入手しそれを報告できる者が「即見驚畏而」することはあり得ない、火遠理命は和邇の大きさを測り八尋という数値を入手したが決して驚いて逃げてはいないのではないかと、和邇が自分に危害を加える恐れがないことを認識していたのではないかと推測したが、実際のところ、火遠理命は、この八尋（14.4メートル）の和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が自分に危害を加えることを心配する必要がなかったし、逃げ出す必要もなかったのである。

先に、八尋の無生物に身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることは難しい、と述べた。また、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる無生物の側で陣痛に苦しむ姿を見たのではないかと推測した。

実際のところ、人間一人、それも出産直前の妊婦一人の力では、八尋和邇と呼ばれた14.4メートルの大型のカヌーに身をくねらせていると見紛うほどの動きをさせることはできない。14.4メートルの和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が身をくねらすことはないため、実際には、豊玉姫は、苦しみのあまり、14.4メートルの和邇（wa'a-nui、大型のカヌー）が前後左右に揺れるくらいに、船上でのたうちまわっていたのではないかと推測した。

伝承は、やがて、火遠理命は豊玉姫が八尋和邇と呼ばれる生物になってうごめく姿を見た、と劣化したのであろう。八尋和邇と呼ばれた大型のカヌーは決して危険ではなかったのにもかかわらず、『古事記』は、さらに、火遠理命は見ただけで逃げ出した、としてしまったのである。

大きさ（長さ）が八尋（14.4メートル）の産屋の中では、八尋（14.4メートル）の生物/無生物が前後左右に動くことは不可能であるが（左右方向は、部屋の形状により可能）、八尋の生物/無生物が動かないのであれば、八尋の産屋にきちんと納まる。先に、鵜羽神社の社伝が産屋の大きさ（長さ）を八尋であるとするを単純に数字合わせをしているだけと見るのではなく重要な情報を提供するものと見てよいのではないかと述べたが、実際、極めて正確な情報であることがわかる。産屋は、八尋和邇（14.4メートルのwa'a-nui）の大きさに合わせて造られていた、と考えてよからう。そうであれば、豊玉姫は、身分が高くとも、実際には、分娩専用の部屋でお産をしたのではなく、船（八尋和邇、14.4メートルのwa'a-nui）の格納庫（をも兼ねる部屋）でお産をしたのであろう。

長い歴史の中で、多くのものが消えたり消されたりしていくが、何かしら痕跡が残ることがある。和邇という名称は、古代日本語が文字表記の手段を手に入れていたため、辛うじて残ったが、その意味はわからなくなってしまった⁶⁰³。海の民の言語や文化は、受け継がれることのなかった言語や文化なのである。

7. さばに

『日本国語大辞典』（第二版第六巻）は、「さばに」を次のように説明する（p.150）。

さばに〔名〕沖縄地方で使われる民俗的な小船。本来丸木船であったが、近年は材料的な制約からはぎ合わせ船となる。幅の狭い細長い船型を特徴とし、櫂、または小さい帆をあげて航海する。〔方言〕丸木船。刳舟（くりぶね）。沖縄県首里993 石垣島・波照間島996

単語の生成において、他言語（特に周辺諸語）からの借用はしばしば見受けられる。中国語に「沙船」と呼ばれる船がある。《汉语大词典》(第五卷)は、次のように説明する（p.956）。

【沙船】一种遇沙不易搁浅的大型平底帆船。明茅元仪《武备志·军资乘·沙船》：“沙船能调戢使鬪風，然惟便於北洋，而不便於南洋，北洋淺南洋深也。沙船底平，不能破深水之大浪也。北洋有滾塗浪，福船、蒼山船底尖，最畏此浪，沙船却不畏此。”清林则徐《复奏遵旨体察漕务情形通盘筹划折》：“如以涉險爲慮，則沙船往來關東，每歲以數千計，水綫風信皆所精熟。”清魏源《圣武记》卷十四：“請言舟制……曰沙船，調戢使風，三桅五桅，一日千里，大帆長馳，增以舷柵，江海是宜。”

沙船は、海や長江下流で運輸や漁労に使う木造平底の大型帆船であるが、さばには、この船名を借用した可能性があるのではないだろうか。

ハワイで、人々が文字と接するようになったのは、1778年にキャプテン・クック一行がハワイに到着し、土地の言語を記録したことに始まる。続いて訪れた宣教師たちは、布教のために、人々の話す言葉をローマ字で書き表わしたが、弱く発音されるV音とW音とを書き分けず、両者をW一文字に統一して書き記したために、弱いVの軽唇音があたかも存在しないように思われてしまっている。

Wは、語頭の場合、WまたはVに発音し、母音の後またはオキナ（‘、グロッタル・ストップ）の後にくる場合、Vに発音する。例えば、Hale'iwa, Hawai'iは、ハレイヴァ（ハレツイヴァ）、ハヴァイ（ハヴァイツイのように発音する。このようにW一文字で表記するには無理があり、Vの文字も加える必要があったようである⁷⁰¹）。

ハワイ語同様、中国語でもWには、Vの異音 (allophone) が観察される (北京方言、大連方言等)。

単語の借用では、一般に、小さな目立たないものではなく、大きな目立つものを借りる。規模や大きさが実物から乖離した例は、枚挙に遑がない。沙+wa'aではなく、沙+wa'a-nuiとしたのは、大きいという情報も織り込みたかったためではないだろうか。こうすることで、サバとの衝突を避けることもできたからであろう。呼び方もサヴァヌイからサバナイ、サバニと変化したのではないだろうか。

8. おわりに

私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、「八尋」や「和邇」の意味を正確に取ることができない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明したりすることができないのである。

私たちは、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。今日の日本語の中に異文化の語彙 (外来語) が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙 (外来語) が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることがはっきりしたのである。学者や研究者は、政治家ではないのだから、外来語は想定外だった、と無責任なことを恣意的に言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の有用な知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「和邇」は「wa'a-nui、大型船」の意であること、「さばに」は「サヴァヌイ」「サヴァニ」(沙+wa'a-nui)の意味構造を借りたものであるらしいこと、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙 (外来語) という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語などの周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

- 101) 山を「やま」、川を「かわ」と言うのは、意味と音声が無意識的に結びついているので、何故そのように言うのかは、説明のしようがない、「さばに」も同じことで、説明のしようがない、と説明された方も中にはおられた。
- 201) 『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄1973,p.289）、加良怒（山口佳紀、神野志隆光1997,p.304）。
- 202) 茂在寅男1984,p.32。
「枯野」などの解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。
- 203) 筆名。本名、政行。
- 204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP（夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>）では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p.137)の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。
引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。
- 301) 寺川真知夫1980,pp.141-142。引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。
- 302) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996,p.390の原文表記。
寺川真知夫1980,p.142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。
- 303) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996,p.437の原文表記。
なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島、木下、東野諸氏には窮余の策を講じるしかなかったが、歌の趣では、正しく解けるとは限らない。実際、この例でも、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいのに（後述）、逆に解釈をしてしまっている。趣に頼って「手/手乃」の大小を論じる必要は、もはやない。
- 304) 小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、一文字多い/少ない、一音節多い/少ない、という程度の説明に満足せず、果敢にも、歌の趣から、手乃を手よりも小型か、と誤った推測をしたが（注303参照）、これでは、恐らく、小島、木下、東野諸氏は、例えば、菊は普通(サイズ)の菊で、菊乃は大輪の菊という意味の違いや、幸は普通(程度)の幸せで、幸乃は大きな幸せという意味の違いもわからないのではないだろうか。乃は、日本の言語や文化の基層を形成した、いわゆる海の民の言語や文化についての知識がなければ、正しく理解できないが、私たちは、今後「手と手乃」の大小や「菊と菊乃」の違いを論じるのに、趣に頼る必要はもはやない。
- 305) 『日本書紀』（巻第二、神代下、第九段、正文）に、「熊野の諸手船」という船がある。「諸手船」の「手」は、『万葉集』の「手夫祢/手乃舟」の「手」と同じもので、手 (tau) という名の船であり（後述）、「船」は、「手夫祢/手乃舟」の「夫祢/舟」と同じもので、理解を助けるための類名である。tau(舟/船)という情報を、伊豆の知識人(たち)は、手、という漢字で書き記し、島根の知識人(たち)も、同様に、手、という漢字で書き記した、と見てよい。
- 306) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b,p.369の原文表記。
- 307) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a,p.121の原文表記。
- 308) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a,p.162の原文表記。
- 309) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b,p.464の原文表記。
- 310) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数などを考えるとよい。注303)で、歌の趣では正しく解けるとは限らない、とは書いたが、歌等の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」

さくなくろう、と感じられることがあるのではないか。

- 311) 総称の「kau-nui、狩野」は広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。例えば、伊豆半島にある狩野を冠する地名は、kau-nuiとの深い繋がりから名付けられたものであろう。狩野は、茂在氏の挙げる例であるが(茂在寅男1984,p.20)、他にも、例えば、巨濃郡(このぐん、鳥取県)、金浦(このうら、秋田県由利郡金浦)がある。
- 広島県福山市金江町^{かなえちやう}は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江にkau-nui(船-大きい)があることに由来していよう。金江町金見^{かなみ}、金江町薬江^{わらえ}、も、金(属)が見えるのではなくkau-nui(大型船)が見えるのであり、江に(稻/麦)藁^{かなえぎ}があるのではなく、江にwa'a-lua(双胴船)があるであろう。
- また、志賀島^{かなのさき}の叶崎や、高知県土佐清水市の叶崎^{かなえぎ}も、何かの願いが(いつも、よく)叶うからではなく、kau-nui(大型船)が(いつも、よく)通ることで名付けられたものであろう。
- 312) 地名には、その痕跡がある。例えば、田浦^{たのうら}(長崎県福江市)は、浦(の近く)に田圃があるのではなく、浦(そのもの)にtau-nui(大型船、もしくは、tau、船)が見られることで名付けられたものであろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。
- 401) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994,p.157。
- 402) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994,p.157の現代語訳。
- 403) 茂在寅男1984,pp.3-4。
- なお、松永秀夫氏から、カタマランの語源をタミル語とする説はA. C. Haddon and J. Hornel著Canoes of Oceania (Bishop Museum Press、1938年刊、1975年復刻)が初出、との教示を受けたが、未見。太平洋学会編『太平洋諸島百科事典』(原書房、1989年) pp.118-120、「カヌー」(松永秀夫) 参照。
- 404) ④飾以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。羅竹風主編1993,p.1459。
- 405) 例えば、唐の薛逢の詩「観競渡」に、「鼓聲三下紅旗開、兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟のことである。羅竹風主編1993,p.1459。
- 406) 牧魚人、<http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm>。
- 407) 『日本書紀』(神代下、第十段、一書第一)。
- 408) カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入ってきていた、と考えている(茂在寅男1984,p.44)。
- ところで、無目龍は、「無目堅間」(『日本書紀』(神代下、第十段、一書第一)とも表記される。滋賀県琵琶湖畔に「堅田」と表記し「カタタ」と読ませる地名があるが、この「堅」は、「無目堅間」の「堅」と文字表記が同じだけでなく、意味・用法も全く同じである。おわかりであろうが、「堅田」とは、連結したタ(tau、手/田、カヌー)の意であり、『日本書紀』の「堅間」同様、カタマランのことである。「堅田」は、ここの田圃が他所の田圃よりも固い特徴を持つためにそれを地名としたわけではなからう。「堅田」は、カタタ(カタマラン、双胴船)がいつもここを利用し、ここに来ればいつでもカタタ(カタマラン、双胴船)を見ることができることから付いた地名である、と考えてよからう。今日、私たちがカタマランと言う船は、古代日本語の中では、カタマあるいはカタタであった、と考えられる。古代日本人の言語的な運用能力の高さが窺える地名である。
- 501) 『古事記』の原文表記は、以下の通り(山口佳紀、神野志隆光1997,p.134)。
- 爾、将方産之時、白其日子言、凡他国人者、臨産時、以本国之形产生、故、妾、今以本身為産、願、勿見妾。於是、思奇其言、窃伺其方産者、化八尋和邇而、匍匐委蛇。即見驚畏而、遁退。
- 502) 山口佳紀、神野志隆光1997,p.135。
- 503) それぞれ、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994,p.166とp.178の原文表記。

- 504) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994.p.167。
なお、p.130注8は、以下の通り。
座高から判断すると身長は、の意。「尋」は両手を広げた長さで、一尋は五尺または六尺。「七咫・七尺・七尋」と七の数を用いているのは、中国的か。日本の聖数は八。
また、p.166頭注12は、以下の通り。
正文では海神が尊を本土に送ると言ったとあり、この一書では大鰐に乗せて送ったとする。鰐が登場するのは、一書第三（177頁）と記（「海のと邇」）で、一書第四では、尊が海中に行く時の乗物が鰐だとする（181頁）。またこの一書第一及び記では、豊玉姫が出産時に鰐の姿になっていたとある。「鰐」は『文選』巻五、左太沖の呉都賦「鰐魚」の劉注に「長二丈余、有四足、似鼃、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡水、鰐擊之、皆中断、……広州有之」とあり、『和名抄』にもそれを引き「似鼃」と説明する。これは亀甲類の認識であるが、その形態や性質からみれば爬虫類のワニのようでもある。しかし、実物と文字とは一致しない点が多く、しばらくサメ（ワニザメ）に当ると解しておく。
- 505) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994.p.179。
- 506) 『日本書紀』の原文表記は、以下の通り（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994.p.160）。
豊玉姫方産化為竜。
なお、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、書下しで「竜」に「たつ」と読みを振り、以下のような頭注を付すが（p.161）、いずれも誤りである。
『和名抄』に「竜、太都四足五采、甚有神霊也」とある。中国での想像上の霊獣（『説文』『楚辞』など参照）の概念が日本にもたらされたもの。竜は水の支配神であるから、水をたたえている海の、その海宮（竜宮）の主、豊玉姫が竜であったわけである。山幸彦が山（陸上）の支配者であることからすると、姫は異類となる。
- 507) 考察の便宜上、竜/龍は、以下、龍、で表記する。
- 508) 正確に言うなら、「龍」は「和邇」に同じ、「八尋龍」は「八尋和邇」に同じ、である。表記の上では八尋の有無という違いはあるものの、実際には龍も八尋であった、と理解してよい。
- 509) 『日本書紀』（巻第一、神代上）
又曰、事代主神、化為八尋熊鰐、通三嶋溝檣姫、或云、玉櫛姫。
人間が爬虫類のワニになることはなく、まして、八尋（14.4メートル）のワニになることはない。事代主神は、移動に八尋熊鰐（八尋のwa'a-nui、14.4メートルの大型船。熊は未詳）を利用したのである。大型船にも種々あろうが、八尋（14.4メートル）という情報が残ったことは素晴らしい。古代日本語の船舶の名称には、八尋がしばしば登場するが、このサイズの大型船はスタンダードの一つだったのであろう。
- 510) もちろん、この語部（集団）が、和邇（や龍）についての知識を喪失したために誤った情報を伝承に混在させてしまい、それを『古事記』の聴取・記録担当者に提供した可能性もある。この場合、この語部（集団）はどの語部（集団）よりも早く和邇（や龍）に関する正確な知識を喪失したものと考えられる。
- 511) 生け捕りにされた世界最大のワニは、フィリピン南部ミンダナオ島で2011年9月に捕獲された体長6.17メートル、体重約1トンのワニである（ギネス記録認定）。
- 512) 西村秀己「古代の屋島あれこれ」（古田史学の会・関西九月例会、レジュメ、2006年9月16日）。
- 601) それぞれ、Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.375とp.272。
- 602) 記載がなければ事実もない、という考え方では、事実は、恐らく、解明できまい。
- 603) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏は、「八尋」は両手を広げた長さ。「八尋」で長い意」と注を施したが、後半には意味がない。窮余の策であることは、理解できるが、この手法では、如何なる数値でも難く解説できることになる。

モルヒネと同じで、手の施しようがない時にのみ使うものである。実際のところ、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏には手の施しようがなかったであろうが、そうであったとしても、もう一つの方法がある。先の方法ほど解けない苦痛を除くことはできないが、ペンディング（後日の解に待つ）という方法である。これであれば、解けない苦痛は相当程度軽減され、誰でも書けるようなさして意味を持たない注を書かずに済むのである。同所の、「鰐」はサメ、も間違いであるが、同じ間違いでも、p.166頭注12のように、しばらくサメ（ワニザメ）に当ると解しておく、と断定しない言い方の方がましであった。今後、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏を含め、私たちが、八尋や和邇をどう理解するかで苦しむことは、もはやない。

「八尋」を大きい、と考えるのは、間違いである。

八尋和邇の構造の中では見えにくいが一語の中に「八尋」と「大」が併記される場合、「八尋」の大きさの、「八尋」の大きな、という意味であり、「八尋」は単に大きいという意味ではない。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏は、和邇の意味がわからないため手出しができなかったのであろうが、八尋大和邇という表記を見たからには、「八尋」はどうも具体的な長さの情報を伝えているらしい、単に「大きい」で解釈するべきではなかろう、というくらいのことには気付くべきであった。

701) Lorrin Andrews 2003にalphabetと題する説明がある (pp.xi-xii)。

Although Hawaiian had been written since the time of Captain Cook's visit, its sounds had never studied systematically. For this reason, explorers and other visitors varied widely in the way they wrote Hawaiian words, since they usually used the spelling conventions of their native language.

But Hawaiian needed its own alphabet, nor one based on that of another language. At first, the main problem seemed to be how to write the vowels. For a short time, the missionaries wrote some of the vowel letters with numbers, but they discarded the system when they saw how confusing it was. In late 1821, influenced by the decisions already made in Tahiti, the missionaries decided to write the vowels in the so-called foreign or continental (e.g., Italian), not the English, way. The result was a perfect match between the sounds and the letters -- at least for the short vowels.

The consonants, however, presented a different problem. As visitors to Hawai'i in the first two decades of the nineteenth century gradually discovered, certain consonants varied, not only from place to place, but even from speaker to speaker in the same area. These were the troublesome groups:

t -- k b -- p l -- r -- d v -- w

In other words, whether a speaker said, for example, *hale* or *hare*, the word still meant house. Native speakers were consulted again and again, and the results were the same: it simply didn't matter which of the sounds in the group was used.

In the spoken language, this variation presented no difficulties. But for compiling a dictionary, the problem is obvious: how does someone look up a word if there are several ways to spell it?

In 1826, the missionaries put the question to a vote, deciding on k, p, l, and w and discarding the other letters, except to write foreign borrowings. With two exceptions--the glottal stop and vowel length (which those who knew the language could usually infer through context) -- this efficient alphabet made it very easy for Hawaiians to read and write their own language.

Wは、母音「o」や「u」が前にくる場合はWの発音で、母音「e」や「i」が前にくる場合はV

になると覚えてもよい。実際、文字表記に影響されて廃れつつあるようでもある。

参考文献

<日文>

萩原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集7）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集8）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。

寺川真知夫1980。『『仁徳記』の枯野伝承の形成』、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2001。『日本国語大辞典』（第二版第六巻）小学館。

三浦佑之2002。『口語訳 古事記〔完全版〕』文藝春秋。

茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。

<その他>

罗竹风主编1990。《汉语大词典》（第五卷）汉语大词典出版社。

罗竹风主编1993。《汉语大词典》（第十二卷）汉语大词典出版社。

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

Lorrin Andrews 2003. *A Dictionary Of The Hawaiian Language*, Island Heritage Publishing.

〔付記〕

本稿は、佛教大学平成24年度国内研修の研究成果の一部である。

（こう とうじ 中国学科）

2012年11月15日受理